

[41] 英国ロイヤル・バレエ団の日本人スター

～熊川哲也 と 吉田都～

1997年7月11日 東京新聞 夕刊

昨年のことだったか、英国王室のプライベートが派手な話題を提供したことがあった。まったくもってよけいなお世話なのだが、あるいは英国のロイヤルテュー（王族）にはそれだけ人の心を騒がせる何かがあるのだろうか。

この六月に来日公演を行った英国ロイヤル・バレエ団にとっても、「ロイヤル（王立）」という形容詞は中身が濃い。というのも、デンマークやスウェーデンなどヨーロッパに幾つかあるロイヤル・バレエの中で、この英国ロイヤル・バレエに關してだけ、ロイヤル・スタイルという言い方が知られているからだ。

英国ロイヤル・バレエ団に特有の芸風といった意味だが、その背景には、英国王室の伝統と存在感があることは否定できない。バレエ団そのものは二十世紀半ばの創立で、さして古い歴史があるわけではないのだから、なおさらである。つまりロイヤル・スタイルということばは、単に英国ロイヤル・バレエ団のダンサーたちに共通のスタイルという以上に、「英国の王侯のような品格がある」というニュアンスで使われているのだ。

では具体的な身体表現としては、そうした資質はどのように現れるのかと言えば、まずは胸の構

[41] 英国ロイヤル・バレエ団の日本人スター

～熊川哲也 と 吉田都～

1997年7月11日 東京新聞 夕刊

えがしっかりしていること。品位があつて、しかも節度があるのが特徴である。その上で、脚や爪先をデリケートに動かす。腰や腕を必要以上におおげさに振ったりはしない。英国ロイヤルのコール・ド・バレエは非常に統制がとれている反面、パリ・オペラ座バレエなどに比べてダンサー各人の個性が弱いように思うことがあるが、実はそれが貴いロイヤル・スタイルなのである。

今から三十年、いや十数年前の英国ロイヤル・バレエ団の舞台には、まだこうした雰囲気濃厚にただよっていた。有名なマーゴ・フォンテーンは愛らしさのなかにも貴婦人然としたところが魅力だったし、つづくレスリー・コリアも、真っ直ぐな上体ときれいな爪先が身上だった。現在の芸術監督のアンソニー・グウエルも、現役時代は筋金入りの品格がトレードマークだったものだ。

しかし、時代とともにロイヤル・バレエの芸風も変化した。そもそもスタイルというものは固定化すると生彩がなくなるものだし、またとりわけバレエは、つねに新奇な感興を求めて変化するという性格を持っている。英国ロイヤルだけでなく、過去二十年ほどのあいだに、世界のバレエのテクニクや美意識は信じがたいほど大きな変質をと

[41] 英国ロイヤル・バレエ団の日本人スター

～熊川哲也 と 吉田都～

1997年7月11日 東京新聞 夕刊

げているのである。

そればかりでなく、英国ロイヤル・バレエは三十年ほどで急速に国際的な色彩を帯びたということもある。前回の九二年の来日でも、プリンシパルと呼ばれる主役級ダンサーのなかにフランス人、イタリア人、ロシア人、ハンガリー人、オーストラリア人と、多彩な国籍のアーティストを揃え、さすが七つの海を制覇したお国柄だと感心したものだ。スタイルも多様化して当然である。

その前回に比べれば今年は外国人が少ないと、いったんは思っ、いやとんでもない、日本人のプリンシパルが二人も加わったじゃないかと改めて思い返した。

熊川哲也と吉田都である。群舞にまじっているというならともかく、あまり正々堂々と主役で登場されると、日本のバレエ団が海外のスターをゲストに招いたみたいで、いや実際はその逆なのだけれども、始めは海外のバレエ団のスターという実感がわかなかつたりする。

ところがこの二人の舞台が実になかなかの見応えだった。それもプリンシパルとして恥ずかしくないというだけでなく、ロイヤル・スタイルの伝統と行く末について、もう一度考えさせるきつ

[41] 英国ロイヤル・バレエ団の日本人スター

～熊川哲也 と 吉田都～

1997年7月11日 東京新聞 夕刊

けにすらなった。

熊川哲也は全幕『ドン・キホーテ』の主役バジルの他に、「ロイヤル・ガラ」で『プッシュ・カムズ・トウ・シヨブ』の第一舞踊手を踊ったのが鮮やかな印象を残した。振付のトワイラ・サーブが「彼はエレガントだから」と言ったというのを耳にして、ヨーロッパ人の中で、とちよつと意外な気がしたのだが、高いジャンプも見事だけれど、それよりも思いなし苦々しげでクールな感じが、何というか、とてもブリティッシュなのだ。

また吉田都は『タリスマン』パ・ド・ドウが実にすばらしかった。動きをたどっているうちに、その繊細で抑制の利いた優雅さにしたたか酔ってしまう。そう、何とも良質のロイヤル・スタイルなのである。時代の波間に失われかけたロイヤル・スタイルを日本人プリンシパルに見い出すとは、思いもかけないことだった。

それにしても、片や英国バレエの伝統的スタイル、片や日本古来の抑制の美学とが奇しくも響き合うのを見る喜びは、まさに二十世紀末の日本のバレエ・ファンに与えられた特権的な体験だと言えないだろうか。